

なぜアメリカはこれほど多くの戦争を仕掛けるのか

【訳者注】現在のアメリカの“狂気”の外交戦略の由来と歴史を、わかりやすく説明してくれる。アメリカ(ワシントン)は突然、狂ったのではなく、前から狂っていたのだということ、中国がたえず強欲な彼らの頭にあり、それが日米戦争を引き起こし、冷戦を経て、現在に至るまで、彼らの世界制覇の野望が世界市民の大量死と大破壊を招いていること、また正しい日米戦の解釈が、アメリカでも行われるようになったことがわかる。このように見ると、敗れたとはいえ、“国家の品格”を貫いたのは、日本だということがよくわかる。

By Murray Polner

April 9, 2015

James Bradley は新著 *The China Mirage* (中国という蜃気楼) で、なぜ彼の父が、硫黄島で日本人と戦うことになったのか自問している。そしてその戦争の淵源を訪ねて行きついたのは、アメリカの間違った政策、その中国への経済的・長者的な興味、そして日本もまた、中国と東アジアに対する真剣な、競合する興味をもっているのではないかという、アメリカの怖れだった。彼は、彼の父が、あの神に見捨てられた島に連れてこられたのは、中国が日本の支配と搾取から解放され、それによって、アメリカと、その帝国主義的盟友、イギリス、オランダ、それにフランスが、その市場、資源、および地理的地位を手に入れるためだった、という結論にたどり着いた。

私は最近、1966年の眠くなるような映画 *Sand Pebbles* (砲艦サンパブロ) を見たが、これは1920年代中期の、国家主義的・領主的・共産主義的内戦の期間に、アメリカの小砲艦が揚子江を航行して、中国の奥地にまで入り込むという内容である。しかし、この映画が決して説明しないのは、この船がそこへ行った目的は、欧米の帝国主義者たちが、何十年にもわたって一方的合意によって獲得していた、商業権と治外法権の保護だったことである。

1784年、中国貿易から利益を得ようとする実業家たちの出資による米艦船“エンプレス・オブ・チャイナ”が、広東に着いた。そして19世紀に入るまで、フランクリン・D・ルーズベルトの祖父を含む、何人かのアメリカ人がアヘン取引で財を築いた。アメリカが中国に対して負債国になるずっと前には、多くのアメリカ人実業家が、中国貿易によって得られる莫大な財宝を夢見ていた。私は、ニューヨーク市立大学の政治科学の教授が、教室で言っていたことを思い出す——「想像してみなさい、もし中国人全員が毎日、白いシャツを着るこ

とにしたら、アメリカの白シャツ製造業者にとって、それがどういう意味をもつと思うか？」

ブラッドレーの主張しているのは、アメリカ人はずっと中国を誤解し、誤った判断をしてきたということで、それは彼らが、中国はキリスト教にあこがれ、欧米化されたがっているという幻想にとらわれ、中国が独自の国家的利害を、昔も今ももっていることを無視したためである。これが最も明らかになったのは、自分の利益圏の一部として中国を支配しようとしていた日本が、満州を侵略した 1931 年後であり、これをアメリカは直ちに侵略行為として弾劾したのだった。日米両国とも喉から手が出るのが中国だった。

日本が真珠湾を攻撃したとき、ほとんどすべてのアメリカ人が、その時も今もそうだが、これを、罪のないアメリカに対する、ずる賢い、正当な理由の全くない攻撃だと考えた。ほとんどのアメリカ人が、ヨーロッパのナチスによる征服にはあまり関心を示さず、12月7日、ルーズベルトの「屈辱の日」に、“ジャップ”どもがやったことに激怒していた。それに続いて、アメリカの日本人 2 世と 1 世を、西部砂漠の収容所に収監することが道徳的にも法的にも正当化されるようになり（それぞれ異なった理由で、ノーマン・トマス、ロバート・タフト、J・E・フーヴァーは、少数の反対する公人だった）、野蛮な太平洋戦争を戦い、日本の民間人を狙った核爆弾をもって、戦争を終結させるのも合法的だった。

ここ数年間、ブラッドレーのような作家が、アメリカではなく、日本が一方向的に戦争を挑発し、領土拡張を狙い、妥協しようとしな——つまり中国支配の役割を手放せというアメリカの要求を聞き入れない——軍国主義国家だったという、これまで支配的だった共通見解に、異を唱え始めている。Bruce M. Russett のほとんど忘れられた 1971 年の本 *No Clear and Present Danger: A Skeptical View of the U.S. Entry into WWII* は、アメリカは（英、オランダとともに）石油や原材料の輸出禁止措置を、それらの生命的資源の全くない日本に対して取ることによって、その後の戦争の計り知れない原因を作ったと論じている。ラセツトはこう結論している——「日本にとって原材料の不足の脅威は明らかであったにもかかわらず、経済的措置を次第に強めていくという政策は、日本を、それが狙いだった条件付き降伏へでなく、アメリカとの戦争へ追い立てることになった。」

ブラッドレーの見方は、もし日本がアメリカの要求に屈していたら、それは中国を見捨てて、新しい帝国主義的な、プロ西洋の「門戸開放政策」を取っていただろう、というものである。しかし日本は、アメリカの中国介入は、彼らの西半球の絶対的支配を要求する「モンロー主義」と、何ら変わりはないと考えた。ひとたび石油パイプラインが閉ざされたとき、日本は「打ち上げられた工業国家クジラ」のようなものだった、とブラッドレーは書いている。

東京もワシントンも動こうとしなかった。そこで、ディーン・アチソン、ヘンリー・スチム

ソン、ヘンリー・モーゲンソーをはじめとする、ホワイトハウスのタカ派たちは、「東京にチクタク時計を仕掛けた。」驚いたことに、ブラッドレーの明かしたところによると、フランクリン・ルーズベルトも、彼の国務長官コーデル・ハルも、アチソン一統が、一方的に石油の輸送を止めていたことを知らなかった。これについて日本の歴史家・入江 昭は、1981年、「日本人に計り知れない心理的衝撃を与え」、直ちに東京を自殺的戦争へと導いたと結論している。

ブラッドレーの『中国の蜃気楼——アメリカがアジアにもたらした災難の隠された歴史』は、生き生きして緊張感ある、周到な研究で、ある人々はきっとこれを修正主義歴史として退けるだろう。日本に対する禁輸と制裁についてラセットの見解を反映させながら、その先へ議論を進め、真珠湾よりはるか前に、アメリカの政策決定者たちは、もし日本が、英仏領の東南アジアとオランダ領インドネシアを征服したら、戦争を始める意志をもっていた、とブラッドレーは非難している。それは、アメリカの産業を発展させたゴム、スズ、タングステンの損失を意味するものだったからである。ブラッドレーの論点は、すでにジョージ・ヘリングの『植民地から強大国へ』(George Herring, *From Colony to Superpower*) に部分的に取りこまれていた——「我々は誇り高い国家を支持して、その唯一の選択が戦争か降伏であるような立場に立たせるようにした。〈深刻な外交の大失敗は、基本的なアメリカの国益にとって重要でない問題——中国の戦争——を、最後の瞬間に、外交政策の中心課題にしたことによってもたらされた〉と John Toland は結論した。(今日のアメリカが、ますます深くウクライナに巻き込まれていくのを考えてみよ。) 実際、Jonathan Marshall の『持つことと持たぬこと』(*To Have and Have Not*) に書かれているように、祖父の中国への情熱を受け継いだ F・ルーズベルトは、「アメリカは東南アジアの天然資源やシーレーンを失う余裕はないという基本的命題」に合意したが、そのような政策が戦争につながる可能性をもつことを、決して大声では言わなかった。これは今日のアメリカ人への警告であって、万一、中国が南シナ海の、日本やフィリピンや台湾が領有を主張する、あの岩だらけの無人諸島に上陸したなら、相互防衛条約によって、我々は戦争を始めることを余儀なくされるであろう。

アメリカは、中国の内戦の間は、撃ち合いの戦争をなんとか避けていたが、1927年後半以降は、蔣(介石)に賭けることにした。第二次大戦が終わりに近づいて、国連が設立され始めると、F・ルーズベルトは、蔣の中国を国連の“ビッグ4”に加えることを主張した。しかしこれは、あの常に引用に値する言葉で、チャーチルによって嘲笑された。彼は戦時回顧録の4巻にこう書いている——「ワシントンでは、アメリカ人の頭の中では、中国が、異常な重要さを与えられ、トップにさえ置かれていて、これは私には、奇妙に均衡を失ったものと思えた。」しかしルーズベルトと彼の腹心たちは、これには動かされなかった。

何年にもわたって、ワシントンの外交政策エリートと従順なマスメディアは、蔣と彼の美貌

のアメリカナイズされた妻への、民衆の支持を煽った。この夫妻を、宣教師の息子である Henry Luce は、彼の影響力ある雑誌「タイム」で繰り返し称賛した。その間、何百万ドルというアメリカのカネが、蔣とその妻の有力な宋家に注ぎこまれ、国民党は実は日本と戦っていたのだという幻想をつくり出した。しばしばカネが消えることがあった。(これについても、我々の説明できない巨額のカネが、我々のイラクやアフガンの戦争“同盟者”に送られていることを考えるべし。) ブラッドレーが言っているように、「蔣は外国の大金を操っていた。」これはトルーマンが後に同意し、蔣と彼の仲間を泥棒と呼んだときの感情である。ついに 1949 年、アメリカの寵児だった蔣介石と国民党は、毛沢東の共産党に敗れ、アメリカは、ニクソンとキッシンジャーが密かに北京を訪問するまで、この政変を認めなかった。

実のところは、もしモスクワとワシントンの冷戦がなかったならば、朝鮮戦争は(ベトナム戦争も)なかったのである。そこで 1950 年 6 月、アメリカの政策決定者たちは「小さなアジアの内戦を、彼らの地球的囲い込み政策への挑戦」と解釈してしまった。「実は北朝鮮の行動にすぎなかったものを、モスクワが北京とピョンヤンに働きかけ、38 度線を越えるように命じたものと、誤った結論を出したのだった。」犬どもを追い払うために、アチソンはトルーマンに、議会の承認なしに軍隊を送ることを勧めた。ひとたび撃ち合いが始まり、中国“義勇軍”が戦争に加わってからは、中国ロビーとその議会同調者が、相手に譲歩して中国を失った者として、トルーマンを弾劾した。マッカーサー元帥と中国ロビーは、繰り返しトルーマンに対し、敗北して追放された蔣の軍隊を、中国軍と北朝鮮軍に向かって“解き放つ”べきだと進言した。トルーマンがマッカーサーを不服従のかどで解任したのち、中国ロビーは荒れ狂った。

「あの野郎(トルーマン)は弾劾すべきだ」と、ジョー・マッカーシーは唸った。それでも動かなければと、アチソンは、信じられないことだが、「ひそかに軍隊をインドシナのフランス人たちに送って、ホー・チ・ミンと戦わせる」ようにトルーマンに進言した。「討論することもなく——討論は求められなかった——自分もろくに理解していないアジアの出来事にいきり立った一人の“長老”(アチソン)が、アメリカを、現在と将来の戦争へと運命付けることになった。」David Halberstam の朝鮮戦争について目を開かせる本 *The Cold Winter* が正しく述べているように、「中国問題それ自体が、あらゆる決定の上ののしかかっていた。」

“誰が中国を失ったのか”が、扇動政治家、私的・宗教的利益団体、富裕な実業家、それにジョー・マッカーシーや彼の取り巻きの、虚偽に満ちた、燃焼しやすいスローガンとなった。彼らは、脅迫され恐れをなした国務省やホワイトハウスに飛びかかった。ベテランの中国専門家が、毛はスターリンの手下ではないとか、蔣とその一味は腐敗して無能だ、といった報告をしたために、迫害され起訴されて、クビになった。(例えば、John Paton Davies, Jr. の

『中国という切り札：自伝』（*China Hand: Autobiography*）を見よ。）

いま振り返ってみると、一つの恐ろしい怒った国家が狂ったのだった。ブラックリスト、投獄、わずかだがソビエトのスパイ（我々もまたロシアにスパイを送っていた）、それに恥ずかしいほどに順応するマスメディアが、批判能力をもった人々を脅迫し黙らせるのに協力した。ブラッドレーの指摘によると、アチソンの悪名高い、秘密の NCS - 68 政策は、1950 年 4 月に採用され、この国家を、“悪なる” 国家を懲らしめる地球的な軍国主義国家にした。これをアイゼンハワーが後に [大統領退任のスピーチで] 警告したが、成功しなかった。ブラッドレーは、ジョンソン大統領のベトナムへの深入り、ジョージ・ブッシュの忌まわしいイラク侵略、それに複雑な宗教的・政治的対立のもつれる中東への、オバマの没入を、理解しやすくしてくれる。

現在、あたかも歴史を繰り返すように、オバマの不可解な、説明されない“アジアへの軸足転換”は、明らかに、アメリカや日本とはもはや縁の切れた、強力な中国に狙いを定めている。戦争と平和について学ぶべき教訓がある。そしてブラッドレーの貴重な本は、過去とこれから先の、必要のない他者への介入について、警告を与えている。

（マレー・ポスナーの著書としては、ベトナム戦争時代の徴兵忌避者を扱った *No Victory Parades: The Return of the Vietnam Veteran*、また *When Can I Come Home* (Jim O'Grady と共著)、ダンとフィル・ベリガンの伝記 *Disarmed and Dangerous*、そして最近著として Thomas Woods, Jr. と共著の *We Who Dared to Say No to War* がある。彼はまた、History News Network のシニア・レビューアーでもある。）